





国語問題

はじめに、これを読みなさい。

1. この問題用紙は十ページある。ただし、ページ番号のない白紙はページ数に含まない。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
3. 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
4. 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 問題に指定された数より多くマークしないこと。
6. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入のこと。
7. 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
8. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
9. 解答用紙はすべて回収する。持ち帰らず、必ず提出すること。ただし、この問題用紙は、必ず持ち帰ること。
10. 試験時間は六十分である。

マーク記入例

良い例	悪い例
	  

—
次の文章を読んで、設問に対する答えを、解答用紙の該当欄に記入、またはマークしなさい。

江戸時代、一般社会の常識において、武士道として認められていたのは、昔風の武士道であった。このことを最もよく示しているのは、赤穂四十七士の敵討に対する一般世人の反応である。この事件が起ると共に、賞讃の声は、一般世人の間から湧き上った。それは武士の側から宣伝したわけでもなく、また何かの理論的根拠づけをやつて見せたわけでもなく、直接世人の側から起つたのである。その事情は『堀内伝右衛門覚書』にはつきりと現われている。伝右衛門は、事件後、大石以下十七人を預つた細川越中守の家来であるが、四十七士の一人富森助右衛門に対して、次のように云つた。

各の様の御忠義、古今無双の御忠臣と末々まで感じ奉る事は、この頃非番の時々、少し遠方に用事これ有り、町屋敷より出で、かごに乗り候て参り候道すから、駕昇ども申し候は、「四十六人の衆は昔の弁慶・忠信にはましたる人柄、男振りまでそろひ、大男にて、中んづく大石主税殿と申し候は、若年には御座候へども、大男大力にて、その夜も大長刀にて弁慶にも優りたると承り候」と申し候。誠に心なきその日ぐらしの駕かき・日雇のものまで感じ奉り候事、日本の神、屋敷へ出入りの町人どもも、この咄し仕り候。

伝右衛門は単なるお世辞と思われなために、日本の神にかけて誓言しながら、赤穂義士に対する賞讃の声が社会の最下層にまで行き亘つていることを報告しているのである。しかもその賞讃は、『義経記』の伝統の下にこの敵討事件を理解するという形でなされている。して見れば、当時の一般世人が、同じように『義経記』や『曾我物語』の伝統の下に、この敵討を義挙として礼讃したことも明かである。伝右衛門の右の報告は、勿論四十七士の処刑以前のものであるが、処刑のすんだ直後には、堺町の勘三座が、この事件を『曾我夜討』に結びつけて上演した。敵討事件であると共に、主君への献身なのであるから、『義経記』と『曾我物語』との双方に結びつくのは当然である。

このように赤穂浪士が義士と呼ばれ、その敵討が義挙として讃えられるということは、当時の世間一般の大勢であった。勿論その中には武士も含まれている。だから「学士大夫増紳先生より、下駄夫馭子に至るまで」悉くその義を称えたと云われる。

やがて年と共に義士に関する文献は増大し、この「義拳」を題材とした歌舞伎狂言、操浄瑠璃^{あじろ}だけでも、二十種近くを数えるに至った。これらの中で最も人気の高かったのは『仮名手本忠臣蔵』であり、殆んど江戸時代の代表作のような観を呈している。

しかし赤穂浪士は処刑されたのである。もし世間の見るようにその敵討が「義拳」であり、浪士たちが「義士」であるならば、死罪に処せられる筈はないであろう。一般の世間の賞讃にもかかわらず、幕府は浪士たちの義を認めなかった。それぞれの大名の家中における主従関係の道義は、日本の国家の立場に優先することは出来ない。主従関係に即して忠臣義士であったとしても、国家の秩序を乱した限りにおいては不義の士である。この考はまた士道の立場とも合致するであろう。従つてここには、主君のために命を捨てることを眼目とする古い武士道と、仁義の実現を眼目とする新らしい士道との、衝突がある。世間の人気では前者が勝つたが、実際の事情は後者が支配していたのである。

士道の立場を代表する意見は、荻生徂徠^{おぎゅうそらい}や太宰春台^{だざいゆんたい}に見ることが出来る。当時徂徠は柳沢吉保^{よしやす}に仕え、將軍綱吉^{つなよし}からも愛顧をうけていた。即ち官学の中樞にいたのである。春台はその高弟であつて、徂徠よりも二十年若い。これらの学者は、赤穂浪士が義とせられる所以を見出すことは出来なかつた。何故なら、敵と見られた吉良義央^{よしなか}が赤穂侯を殺害したのではなく、逆に赤穂侯が義央を殺害しようとしたのだからである。その被害者を君の仇と見るのは、何と云つても理窟が立たない。なるほど赤穂侯は死んだ。しかしその死は国法による処刑であつて、義央の関知するところではない。もしその刑が過当であるというならば、刑を決定した幕府を怨むべきであつて、義央を怨むべきではなからう。赤穂の士にしても義に明るければ、義央などを眼中に置かず、幕府を相手として一戦を試み、然る後城に登つて火を放ち、その中で自殺すべきであつた。良雄^{注2}等のなすところは、大義を仮りて利欲^Fをなすにほかならない。

この批判は、『義経記』『曾我物語』等の伝統を全然眼中に置かず、ただ儒教の立場のみから論じたものである。この立場に立てば、右の伝統そのものも是認し難い。春台はこのことを右の批判のなかに書き込んでいる。「我が東方^Gの士、自ら一道あり。その君長の死を見て、立ちどころに心乱れ狂を発す^H。踵を旋らさずしてその難に赴き、ただ死を以て義となす。その当否

を問はず。仁者よりこれを観れば徒死たるを免れず」というのである。即ち春台にとつては、献身そのものに意義があるのでなく、献身によつて達するところの当否に意義があるのである。この見地に立てば、弁慶・忠信の類もすべて徒死たるを免れない。命を惜しまないことを中核とする武士道は、畢竟犬死の道に過ぎないであろう。

こういう見方がただに少数の学者の間に行われていたに止まらず、支配層における主導的な考え方として、実際の処刑を決定したことは、十分注目されてよいことである。しかもそれが恰かも少数意見であつたかのように片隅に押しやられたのは、民衆の間に常識として存していた古い武士道の勢力によるといつてよい。云いかえれば、赤穂浪士を義士たらしめたのは、『忠臣蔵』の芝居をカツサイして迎えた一般民衆であつて、それと區別された意味での武士階級ではないのである。

しかし武士たちの中にも、士道に満足せず、古い武士道を固持している連中のあつたことは、『葉隠』の示す通りである。

春台は東方の士が「心乱れて狂を発し」、ただ死ぬのを急ぐことを指摘したが、山本常朝はそういう非難を逆に利用して、死狂いを武士の本領とした。彼の眼中にはその主君のみがあつて、幕府も將軍もない。主君に対する熱愛を以て、あらゆる瞬間に死を以て奉仕する、それが武士の奉公であつた。その死が徒死になるかどうかという如きことは、ここでは全然念頭に置くべきでなかつた。「凶に当らぬは犬死などといふ事は、上方風の打ち上りたる武道なるべし」とさえも云つてゐる。ところで、こういう立場から見ても、赤穂浪士が讚美すべきであるかといふと、決してそうではないのである。常朝の批判は相当に手きびしい。「上方衆は智慧かしこき故、褒めらるゝ仕様は上手なれども」、死狂いを本領とする武士の気合いはかかつていないといふのである。

常朝が常住死身の武士道を口授し始めたのは、赤穂浪士の敵討より八年後であるが、しかし年齢からいふと、常朝の方が大石内蔵之助よりも十歳の年長である。従つてこの批評は、大石が死んだ時の年齢に比べて、二十歳近くも年上の老人の口から出ているのである。常朝の意見によると、大石の態度はまだ武士道に徹していない。大石は吉良義央を討ち取ること全力を尽くしたが、しかしそのため二年近くの年月を費している。もしその間に義央が病死でもしたならば、主君の意思をついで怨を晴らすことは出来ず、主君に一命を捧げる機会もなくなつてしまふ。武士としてなすべきことは、主君に一命を捧げることに

であつて、敵討に成功することではない。吉良邸に討入つて義央の首級を挙げる事が出来ず、同志が悉く討死したとしても、武士としての道は立つのである。それに反して、敵討の準備中に敵に死なれたならば、主君のために一命を捧げ得なかつたという腰抜けの事実だけが残る。従つて大石等は、主君が怨を抱いて切腹した時に、その怨を晴らすため即座に立つて敵討を決行すべきであつた。その敵討に成功するか否かなどに拘泥すべきではなかつた。幸にして大石は成功したが、それは運が好かつたということに過ぎないのであつて、武士としての覚悟には未だ足らないところがある。これが常朝の云おうとしたところであつた。

して見ると、新しい士道の立場からのみでなく、保守的な武士道の立場からも、赤穂浪士の敵討は模範的ではなかつたのである。それを模範的なものとして讚美したのが、一般民衆であつて武士階級ではなかつたという所以は、こゝにある。勿論実際においては、武士たちのうちに一般民衆と同じ感じ方をしたものが多かつたであらう。『忠臣蔵』の芝居は武士たちをも喜ばせたであらう。しかし『忠臣蔵』は武士階級の産物ではなかつたのである。それを生み出したのは、鎌倉時代の武者の習の伝統をうけ、『義経記』や『曾我物語』を通じて、主君や親のために身を捧げるといふ献身的な態度に共鳴している民衆、特に町人たちであつた。

(和辻哲郎『日本倫理思想史』に拠る)

注1 忠信↓佐藤忠信。兄の継信つぐのぶとともに源義経の家臣となつて活躍。 注2 良雄↓大石内蔵之助良雄。赤穂浪士の頭領。

注3 『葉隠』↓武士道を論じた書。山本常朝口述。

問一 傍線部A「一般世人」は、より具体的に言うならば、江戸時代のどのような階級を言うのでしょうか。本文の趣旨に基づいて考え、文中の二字熟語を用いて解答欄に記しなさい。

問二 傍線部B「人柄」は、どのような意味合いで用いられていますか。次の選択肢の中から最も妥当なものを選び、その番号をマークしなさい。

- 1 性格
- 2 人相
- 3 容貌
- 4 人品

問三 傍線部C「日雇」と同じ意味の言葉が次の中にあります。その言葉の「日雇」とは異なる読み方を解答欄に記しなさい。

- 1 日願
- 2 日備
- 3 日庸
- 4 日番

問四 傍線部Dの『義経記』は、本文の趣旨に拠れば、どのような内容の作品でしょうか。次のように説明する場合、空欄

X に入るべき六文字の語句を本文から探し、それを解答欄に記しなさい。

『義経記』は、 X を描いた作品である。

問五 傍線部Eの「轆夫馭子」は、どのような意味合いで用いられていますか。本文の中からそれに該当する四文字の言葉を探して、それを解答欄に記しなさい。

問六 本文の趣旨に従えば、赤穂浪士の仇討ちとは、どのような概念の対立であったのでしょうか。それを述べている部分（読点ともに四十八字）を抜き出し、その部分の最初と最後の三文字を、それぞれ解答欄に記しなさい。

問七 (1) 赤穂浪士が処刑された理由を端的に述べている九文字の言葉を本文中から抜き出し、それを解答欄に記しなさい。

(2) その理由を以下のように説明するならば、空欄 Y にはどのような句が入るべきでしょうか。本文中から

七文字で抜き出し、それを解答欄に記しなさい。

赤穂浪士は、 Y に異を唱えたので、罰せられたのである。

問八 傍線部F「利欲をなす」とは、この場合はどのような事を言っていますか。それを示唆している部分を、本文の中から十文字で抜き出し、その部分の最初と最後の三文字を、それぞれ解答欄に記しなさい。

問九 傍線部G「東方」とは、この場合にはどのような意味でしょうか。次の選択肢の中から妥当なものを選び、その番号をマークしなさい。

- 1 江戸 2 関東 3 東部 4 日本

問十 傍線部H「踵を旋らさず」について。

(1) 「踵」の読み方を、解答欄に記しなさい。

(2) その句はどのような意味合いで用いられていますか。次の選択肢から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 足を取られる事なく 2 足も地に付かない状態で
3 足を回転させないで 4 時間を要さないで

問十一 傍線部I「畢竟」の読み方を解答欄に記しなさい。

問十二 傍線部J「カッサイ」を漢字に直し、解答欄に記しなさい。

問十三 赤穂浪士の土道とは異なる古い土道を端的に要約している三文字の言葉を本文から抜き出し、それを解答欄に記しなさい。

問十四 傍線部K「打ち上りたる武道」とは、どのような意味でしょうか。次の選択肢の中から該当するものを選び、その番号をマークしなさい。

- 1 頭に血が上った武士道
- 2 小賢しく計算された武士道
- 3 攻め登って来た武士道
- 4 高慢な武士道

問十五 傍線部L「常住死身」の意味を具体的に述べた事に当る部分(読点ともに二十七字)を本文から選び、その部分の最初と最後の三文字を、それぞれ解答欄に記しなさい。

問十六 次の選択肢の中から本文の趣旨に沿うものをつだけ選び、その番号をマークしなさい。

1 山本常朝は、赤穂浪士の仇打ちにおける吉良義央の立場を加害者であるか被害者であるか、一概には決定しがたいと考えていた。

2 太宰春台は、総ての仇打ちというものを、犬死にであるとして全否定していた。

3 堀内伝右衛門は、古来からの武士道を信奉する点において山本常朝と考え方を同じくする。

4 江戸の人々が『忠臣蔵』を愛好したのは、赤穂浪士の処刑を不当であると認定したからである、と断言する事は必ずしもできない。

次の文章を読んで、設問に対する答えを、解答用紙の該当欄に記入、またはマークしなさい。

慶安四年辛卯(西暦一六五一年)四月二十九日、大猷院殿過ぎさせ給ひて、その七月、江戸にて浪人由井正雪叛逆を巧み、
 紀伊大納言殿の仰せと称し、判形を似せ謀書を所々につかはし、丸橋忠弥・芝原又左衛門以下数百人徒党し、御鉄炮の葉蔵
 の奉行川原重郎兵衛もこれに与し、埋火にて遠くより火をさし、徒党の者ども船にて海上に出づる時、葉に火を移して江戸
 を一時に焦土となさんと巧みたりしに、心替たる者三人ありて訴へ出であらはれしかば、丸橋を始め生捕られ、正雪は駿河
 宮の町にて自害しけり。

右の謀書数通浪人どもものもとにありける故、大臣集まりて一大事と案じ煩ひ、「とかく頼宣卿を殿中へ召して、この書を出

す外あるべからず。其の時様子悪しかりなんには直に捕へ申せ」とて屈強の兵を隠し置きて出仕を待ち居たりしに、尾張中納
 言光友卿・水戸中納言頼房卿も出仕あり、この事を告げ申しけるに、尾張中納言、「何条かゝる企あるべきや。これ謀書にて
 あらん」となりしに、水戸中納言も、「いかにも左候ひなん」とぞ宣ひける。されどもおのおの手に汗を握る処に、頼宣卿出仕
 ありて座に付き給ひしかば、井伊直孝・酒井忠勝・松平信綱、この度浪人どもの巧みの次第を申し述べたる処に、阿部忠秋
 かの状を披露しけり。頼宣卿残らず見給ひて気色うちとけて、「返すがへすもめでたくこそ候へ。もはや何の恐るゝ事も候は
 ず。その子細は、かの徒党の面々、外様大名の判を似せ謀書を作りたらんには、三代の御恩を忘れ、もしや気がひて謀叛を
 企つるとの疑ひもあるべきに、我等が判を似せたる故、事故無く治りたるなり。幼き公方の御身にてもし御疑ひもあらんに
 は、我等只今国さしあげ、いかにも仰せに従ひ奉るべし。天下安全にてこそあれ」と悦び面にははれて見えしかば、両公を
 始め一同に感じ誉めぬ人もなかりければ、頼宣卿、「その浪人どものうち壮年の者四五人助け置かれよ。重ねて詮議あるべき
 為なり」と宣ひけるごぞ。

(『常山紀談』に拠る)

注1 大猷院殿↓徳川三代將軍家光のこと。

注2 紀伊大納言殿↓徳川頼宣(家康の十男)のこと。紀伊は、現在の和歌山県。

注3 大臣↓幕府の重役たち。

注4 尾張中納言光友卿・水戸中納言頼房卿↓光友は家康の孫、頼房は家康の十一男。頼宣とともに、当時の徳川御三家の当主。

問一 傍線部A「過ぎさせ給ひて」の現代語訳として最もふさわしいものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 江戸城をご退去なさつて、
- 2 お亡くなりになつて、
- 3 お休みになつて、
- 4 奥方をお亡くしになつて、

問二 傍線部B「心替たる者」とは、どのような者か。最もふさわしいものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 他の仲間とは考え方が異なる者。
- 2 考えが変わつて、他の仲間を裏切つた者。
- 3 他の仲間よりも機転がきく者。
- 4 他の仲間とは参加の動機が異なる者。

問三 傍線部C「様子悪しかりなんには」の現代語訳として最もふさわしいものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 頼宣の機嫌が悪かつたならば、
- 2 浪人たちの様子が不審だったので、
- 3 頼宣の様子が不審だつたならば、
- 4 幕閣たちが頼宣を疑つていたので、

問四 傍線部D「かゝる企」の内容を、傍線部以前の記述から二字の熟語で抜き出して、解答欄に記入しなさい。

問五 傍線部E「謀書」の意味として最もふさわしいものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 頼宣が將軍への反逆を勧める手紙。
- 2 頼宣が浪人たちと示し合わせて書いた手紙。
- 3 頼宣が將軍への反逆を呼びかける手紙。
- 4 浪人たちが頼宣に罪をかぶせようとする手紙。

問六 傍線部F「されども」は、逆接の接続詞である。その前後の文章は、なぜ「されども」でつながるのか。最も適する理由を次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 光友と頼房の意見は一致したが、頼宣が処罰されることは明らかだったので。
- 2 頼房は、言葉では光友に同意したが、内心は疑わしく思っていたので。
- 3 頼房と光友の意見は一致したが、周囲の者にはそれが意外だったので。
- 4 光友と頼房は頼宣のことを無実と言ったが、他の者はそれでも不安だったので。

問七 傍線部Gで、頼宣は「めでたくこそ候へ」と言っているが、具体的に何がめでたいと言うのか。最も適するものを次の選択肢の中から選び、その番号をマークしなさい。

- 1 「謀書」によって、浪人たちの企てが事前に発覚したこと。
- 2 疑われたのが自分であるならば、素直に処罰を受けることができること。
- 3 企てに参加したとされているのが、外様大名ではなくて徳川家の親類であったこと。
- 4 同じ御三家である光友や頼房が、自分の無実を信じてくれたこと。